

# 壮年期の逆境的ライフイベントに関するライフコース分析

## 高齢者のナラティブから

日本福祉大学 鈴木佳代

### 1 目的

健康の維持生成要因のひとつに、レジリエンス（回復力）という概念があげられる。レジリエンスとは困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程、能力、結果のことである（Masten et al., 1990）。レジリエンスに関する研究は心理学分野で多いが、逆境の乗り越えは社会生活の中に位置づき、ライフコース的文脈の中で経験されると考えられる。そこで本研究では、高齢者へのライフヒストリー・インタビューで語られた壮年期の逆境的ライフイベントについて、それ以前のライフコースにおける経験と関連付けて分析し、その乗り越えの背景要因を明らかにすることを試みた。

### 2 方法

半構造化面接により7名の高齢者に2回ずつ、家庭・職業・対人関係・健康を中心とするライフヒストリーの聞き取りを行った。1回目の面接ではライフヒストリーの概要を聞き取り、2回目には主要なライフイベントや健康・家庭・職業・社会的サポート上の変化について掘り下げを行った。インタビュー時間は1回あたり42分から112分（平均77分）だった。インタビュー内容は文字化してコーディングし、事例-コード・マトリックスと概念モデルを作成して分析した。

### 3 結果

インタビューした7名のうち、4名（男女各2名）が壮年期に逆境的ライフイベントを経験しており、全員がそれを乗り越えたと認識していた。逆境的ライフイベントの内訳（複数回答）は、子どもの死（2名）、経済的苦境（1名）、家族との問題（1名）、疾病（1名）だった。これらのケースには、(1) 比較的幼い時からの乗り越え体験の積み重ねがある、(2) それまでの人生において自己効力感の向上につながるような経験をしている、(3) 仕事をしていることによるアイデンティティや、仕事を通じて得られる稼得やサポートが、逆境の乗り越えにおいて重要だったと認識している、という共通点があった。一方で、(1) 全員が子ども期・青年期に乗り越え体験を有してはいたものの、それを支えた資源として認識されていたのが、出自家庭の社会経済的地位が比較的高い場合には家族であり、低い場合には家族以外だった、(2) 逆境の乗り越え要因についての本人の認識の一部は、①宗教的世界観への当てはめ ②忘却 ③逆境のポジティブな意味からの捉え直し ④楽しみによるストレス軽減等、各人各様だったという差異が見られた。

### 4 結論

壮年期に経験した逆境的ライフイベントの乗り越えは、幼い時からのライフコースの中に埋め込まれていた。しかし、その背景には共通点と、社会経済的環境や個人により異なる点とがあった。今後、レジリエンス研究にライフコース視点を取り入れることで、健康の維持生成要因の解明が進展することが期待される。

【文献】 Masten AS, Best KM, Garmezy N. 1990. "Resilience and development: Contributions from the study of child adversity." *Development and Psychopathology*, 2(4): 425-444.

【謝辞】 本研究は、科学研究費補助金若手研究 B「健康の社会的決定要因をめぐる質的ライフコース研究」（課題番号 24730487）の一環として行われた。